

モノと人の関係を問い直す

たけざわ しょういちろう
竹沢 尚一郎
民博 先端人類科学研究部

文化をめぐる問いひとつひとつにこたえるには、学問の垣根を越え、世界中の知を結集する必要があります。民博の研究者は、いったいどういう人たちと、どういう課題に取り組み、社会と学問の発展にどのように貢献しようとしているのでしょうか。「研究フォーラム」では、機関研究や共同研究といった大小のプロジェクトやシンポジウムなどが、どんな目新しさをもっているのか、発想の興奮を損なわずに、お伝えしていくつもりです。

われわれはモノとのかかわりによって生き、われわれの身体も、モノそのものです。今回は、人とモノのかかわりをもう一度、人類史的視野から問い直してみようという壮大なプロジェクトからの発信です。

人間とは道具を使う動物である。そのような定義がしばしばなされるほど、モノと人間のあいだには深い関係がある。火打石を用いて火を起し、土器を作って煮炊きして、植物の硬い種子を柔らかくして食べるようになったことが、人間の脳皮質の成長を可能にしたとされている。それほど、人間のあり方はモノによって変化してきたのだ。とすれば、大量消費社会といわれ、機械やロボットが無数のモノを生産するようになった現代、わたしたち人間とモノとの関係は変わったのか。ユニクロに代表される、大量生産される安価な商品が世界のマーケットを席巻している一方、アート作品に常軌を逸した価格がつけられ、ブランドのバッグや時計に数カ月分の給料を支払う消費者の行動は、どう理解したらよいか。さらに、モノの収集と展示のための施設としての博物館が世界中で増殖している現象は、なにを示しているのか。タトゥーや整形医療、臓器移植等による身体加工が一般化した今日、わたしたちの身体もまた操作可能なモノと見なされるようになっていくのか。

使い捨てと思い入れ

ふりかえると、わたしたちの行動は二極化しているように見える。わたしたちは一方で、モノを消費し、思い通りに加工し、使い捨てながら暮らしている。しかし他方で、

それらは、神聖な感情を引き起こすものであった。それらはわたしたちを世界に結びつけ、神や仏などの存在を実感させていたのである。しかし今日、博物館や美術館の白い壁の上に置かれ、白々とした光の下で照らされるそれらは、一切の神聖さを失い、単なるモノと化している。とすると、モノに対する人間の関係を変えたのは、十九世紀以降世界中に広がった博物館・美術館という制度でもあることになる。かくしてモノと人間の関係について問うことは、近代の制度としての博物館・美術館のあり方を問うことになるはずだ。

記憶媒体として

あるいは、モノと人間の記憶の関係である。結婚指輪や家族写真をはじめとするさまざまなモノは、人間の記憶を支え、かたちづ



1954年、宝塚の遊園地で展示されていたテレビジョン。価格は18万円、現在の価値で400万円を超える(提供・久保正敏)

唯一性とは

さらに、モノとしての身体固有性にかかわる問いがある。モノとはその定義からして代替可能なものであり、その対極に位置するのは、唯一無二としての「わたし」である。しかし、タトゥー

や整形、臓器移植等による身体加工が日常化した今日、「わたし」の観念は以前のままなのか。もし身体が代替可能なモノに過ぎないとなれば、それに結びつけて考えられてきた「わたし」や精神もまた固有性を失い、代替可能なモノでなくなっているのか。



国際セミナー(民博にて2009.12.8)

一部のモノに対しては「崇拜」ということが適切なほど、深い思い入れと価値を与えている。アート作品やブランド品だけではない。たとえば、結婚指輪や家族の写真、日々使うお茶碗、愛着ある衣服。これらがなくなったり、壊れたりしたら、あなたはどれだけ落胆するだろう。このことを見て、わたしたちの生活と記憶がモノによって支えられ、維持されているのは明らかだ。

場所と意味

考えてみよう。わたしたちが今日、博物館や美術館で目にする古い絵画や彫像の多くは、もともとは寺院や教会に置かれ、儀礼のために用いられていたものだった。薄暗がりのおごそかな雰囲気包まれ、祈りのことがあたりを満ちすなかで目にする

モノから見た世界

本研究は、これから三年の時間をかけておこなわれることになっている。わたしたち研究者は博物館という特殊な施設で働いているが、個々の展示の内容を改善することには努力してきたが、博物館とはなにかと問うことは少なかった。また、博物館とはモノの収集と展示に特化した施設であるのだが、人間にとってモノとはなにか、モノは人間にいかなる力を与えているのか、とあらためて問うこともほとんどなかった。モノは単に受け身の存在ではない。モノはわたしたちを動かし、魅了し、わたしたちの生をかくあらしめている存在である。モノを操作可能な対象とみなすのをやめて、いったんモノの側から見たなら、世界とわたしたちはどのように違って見えてくるのか。本研究がめざすのは、そのような問いからはじめて、モノと人間の関係をみなおすことである。

民博機関研究
マテリアリティの人間学
「モノの崇拜」所有・収集・表象研究の新展開
2009年4月〜2013年3月
代表者：竹沢尚一郎
関連シンポジウム
機関研究国際シンポジウム「エル・アナツイの世界」
実施日 2010年10月30日、31日
場所 国立民族学博物館
スーザン・ヴォーゲルのフィルムを上映